



東京から日本を変え、都民・国民の未来を切り拓く

東京都知事 石原 慎太郎

一 政治の怠慢

多くの国民が希望にあふれた新時代となることを期待した二十一世紀は、早くも十年目を迎えました。しかし、かつての期待とは異なり、今、国民は大きな不安感に覆われております。

これは、サブプライムローン問題に端を発した現下の不況ばかりが原因ではありません。根源的には、日本がどこに進むのが定かでなく、将来への展望を見出すことができないからなのであります。

この十年を顧みても、国政は、長期はおろか中期の戦略すら欠いて政策の優先順位を決めぬまま場当たり終始してまいりました。また、我が国は、戦後の長きにわたっていたずらに物質的繁栄を謳歌してこれに慣れ、心の「たが」が緩んできております。社会の一員として、最低限の義務と責任にすら自覚が薄れた、行政への過剰な期待、モンスターペアレント・モンスターベイシエントに表象される甘えを通り越した横暴までが生まれてきました。しかし、リーダーシップを発揮し「たが」を締め直すべき政治は、消費税増税のような痛みを伴う事柄を避けて美辞麗句を並べ、本来は成り立ち得ない高福祉・低負担への幻想を振りまくばかりであります。

これでは、社会工学上、最も大きな力を託されたはずの政治が、その責務を果たしているとは、到底、言えません。

二 東京がこの国の羅針盤となる

もとより、日本は、これまで幾多の試練を乗り越えてきたように、本来、優れた力を持つております。今に限って停滞しているのは、持てる力を発揮できず不完全燃焼を続けているからにほかなりません。

国民の不安を真に払拭するのは、政治の甘い約束では決してありません。政治が目指すべき未来図と目標を提示し、それに向けて国民の力を引き出し大きく束ねることなのであります。

この十年間、国政の担い手たちが国家の大計を立てぬまま漂流してきたのに対して、都政はときには苦い薬をも飲みながら、危機に迅速に対処してまいりました。東京という「現場」にある英知を結集しながら「十年後の東京」計画で示した未来図の実現を目指し、日本の新たな発展の縁ともなる現実性のある政策を戦略的に展開しております。

今後、覚悟を持って冷静に考え、確実に物事を実行するという、国政では失われてしまった心構えを保ちながら、東京を二十一世紀の範となる都市へと進化させてまいります。この国のあるべき航路へと引き戻す羅針盤ともなる気概で力を尽くし、都民・国民の希望を指し示してまいります。

三 平成二十二年度当初予算案

平成二十二年度の東京都当初予算案は、巨額の税収減に直面し、今後も厳しい財政

環境が見込まれる中で、東京の「現在」と「将来」に対し、都が為すべき役割を積極的に果たすべく編成いたしました。

国のような借金への安易な依存を厳に戒め、基金残高一兆円を維持しながらも、「十年後の東京への実行プログラム二〇一〇」のための経費五千九百九十九億円全額を計上し、投資的経費も四・七％伸ばす積極予算としました。さらに、このたびの予算編成でも、新しい公会計制度によって作成した財務諸表を活用して事務事業評価を緻密に行い、これまで以上に厳しく検証すること、約二百億円が無駄を炙り出して削減し、より費用対効果の高い施策を練り上げました。

今後、複式簿記・発生主義会計を梃子に、職員の金利感覚やコスト意識を高めお役所仕事を払拭するなど、行財政運営のレベルアップを追求してまいります。

複式簿記・発生主義会計を巡っては、大阪府の強い要請も受けまして、職員を派遣し、都の手法・ノウハウを積極的に提供してまいりました。

今後は、大阪府と共同プロジェクトを立ち上げ、公会計制度のあるべき姿を全国に発信しながら導入に意欲的な自治体を支援するとともに、国に対して、国も国際公会計基準にも準拠した合理的な会計基準の策定を求めてまいります。太政官制度以来続く官の姿を変え、総合的な財務情報に基づく自律的な行財政運営をこの国に根付かせるべく取り組んでまいります。